

勝林寺報

「仏教」とはどんな教えでしよう

ひよことすると「死んだ人の弔いをするための追善供養の儀式」。つまり葬式や法事をする儀礼のように思われているかも知れません。實はそうではありません。

「仏教」。「仏の教え」。

族の國の王子として生まれ（紀元前四千年ごろ）、ゴータマ・シッタルタと名づけられた実在の人物が、のち悟りをひらき、「ブッダ」（聖者）と称され、その悟った「眞実」（法ダルマ）を、主にガンジス河流域に説き広めた。そのおしえを「仏教」と言わわれているのです。

その教えはのちに弟子たちによつて「スートラ」（経きょう）といふかたちでまとめられ、全イント・チベット、西域から中国・朝鮮へ、そして日本へ伝えられました。また、南方セイロン島からダレマ、東南アジア、アフリカ

その間ほぼ三千五百年あまり。お釈迦さまの教えは、いろいろな國のことばに翻訳されいろいろな民族や國家に解釈理解され、おなじお釈迦さまのおしえといつても、様々なスタイルを生んでいきました。第一、お釈迦さまの時代には「文字」もなかったので。お釈迦さまが亡くなつて百年ほど後に、お弟子たちが短い短詩形の章句にして口伝していたお釈迦さまのことばを、高弟たちが寄り合い照らし合わせてまとめました。これを後、古代インド語（サンスクリット、パーリー語）で書き留めていきました。いわゆる「結集」とか「合誦」という作業をおこなつて『スッタニパター』（經集）とか『法句經』などの原始經典を造つていきました。

ところが私たちは、あたかも「私（個我）」中心の見解にたつていのちの存在を見ようとはしない。たとえば祖先をみると、ときにも、「わが家の家系は」「家柄は」「血筋は」など、自分に都合のいい勝手な選別差別をして、我が誇りとする。太古の昔からある利己的な差別知見の成立である。この自己中心の狭いこだわり「無明と渴愛」。これを「根本煩惱」とよび、選別・比較・差別の迷惑世界の根源とした。お釈迦さまの時代にあつたいわゆるカースト制度（バラモン・セッテリ・クシャーツトリヤ・スードラの四つの階級制度）。それに対してもお釈迦さまが「縁起の法」を説いたのは、縁起の法からみて、みな「遠く通じるに四海の内みな兄弟なり」とい、弟子たちを平等に「共に歩む人」とよんだのは、その知見の現れでもあった。

「もの」は考えることのできないほどの（不可思議な）原因や条件によつて成り立つてゐるものであつて、単独の固体として偶然にあるものではない。

一例を挙げると、いまここに生きているこの私の「命」。偶然に、また単独に存在していのではない。父母、それから祖父母、曾父母と直系のその数だけ数えてみる。四人・八人・十六人と倍々数えていくと、いわゆる無数の「祖先」。二十代まえで百四万八千六百七十六人。三十代昔には総体四億六千五百五十六万七千七百四十四人となるといふ。其のうちの一人が欠けても今の「わたし」は存在しないわけ。しかも人間のいのちは單に直接の祖先の影響力で成り立つものではない。地球規模宇宙規模の自然環境・歴史的条件など無数の環境条件も重なり合つてゐる。それを「いのちの重み」として感じ今のこのいのちを生きねばならない。

「縁起を見る者は法を見る」

お釈迦さまは何を悟り、また、なにを「法」（真理真実ダンマ、達磨）として教えたのでしょうか。

かりに今は「人のいのち」のうえで「縁起」をみたが、それは人のいのちのみならずすべての存在に適用できる。すべての「造られたもの」（有為法・無為法とも単に法とも言う）。すべてのものは無数無量な原因や条件のからみあいによって仮に成立しているものであるから。その関係が変化すると、いつでもそのありようは変わって行くもの。「無常」なものである。常住なものは一つとしてない。にもかかわらずわたしたちの現実は「わたしひとりの甲斐性で生きているように錯覚し、個我にこだわり、「自分」の見解を主張して止まない。そして「縁起」の世界の眞実を乱し無明煩惱の世界を自ら現出する。無明と渴愛が煩惱の元。比較し対立し我他彼此の選別差別、闘争の煩惱濁世を現出して行く。

「縁起の眞実にめざめよ」

そこで昔からお釈迦さまの教えるの旗印テー  
ゼ（法印）として

諸行無常

諸法無我

涅槃寂靜

また

雪山偈・無常偈（『涅槃經』等の経典）にと  
いううたとして次ぎのように歌われてきた。  
諸行無常

是生滅法  
生滅々已  
寂滅為樂

このうたを日本語にしたのがいわゆる「いろは歌」である。

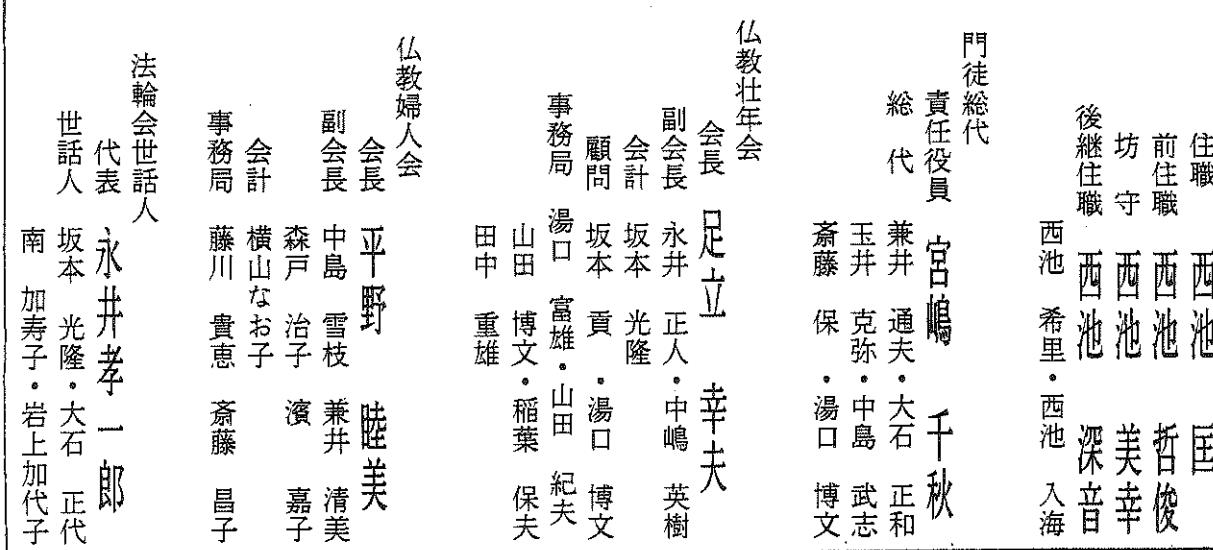
明治大正時代、学校で日本のことばは、この「いろはうた」（最後に京を足した48文字として習った。またその歌の由来を伝えた「前生譚（お釈迦様の前生の物語り）」として「雪山童子」の寓話が教科書に載せてあった。）のよう明治大正のころの教育は、ただ單に日本語の発音表をアイウエオと覚えさせではなく、コトバの中身・意味・思想も教え

そこで昔からお釈迦さまの教えの旗印テー  
ゼ（法印）として  
諸行無常  
諸法無我  
涅槃寂靜  
また  
雪山偈・無常偈（『涅槃經』等の經典）にと  
いううたとして次ぎのように歌われてきた。  
諸行無常  
是生滅法  
生滅々已  
寂滅為樂  
このうたを日本語にしたのがいわゆる「  
らは歌」である。

れの作とも不明ながら、最初から庶民のあいだに愛唱され習字学習に貢献してきた。のみならず、日本の仏教思想文化の基礎学習となつた。

これほど見事に釈迦の説いたおしえを端的に私たちに伝えたものはない。

そこでわたしたちも 次号、お釈迦さまのおしえをこの「いろはうた」から学び聞いて見よう。



もつたいな  
「もつたい」。「勿体」と書くが、本来は「物体」<sup>アシタ</sup>（漢音）。ものがら（毒）の意。吳音で発音すると「モツタイ」。仏教の論議などには「お淨土に往生するのは心か体か、そのモッタイは？」などと使っている。「わたしの力（貢献）は何もないのに」（すべてあなたさまのお力添えのお陰です）の感謝の思いを述べることば。たしかに東洋独自の含蓄のあることば。大切にしたい。先日亡くなつてくれたマータイさんはこのことばの大切さを教えてくれた

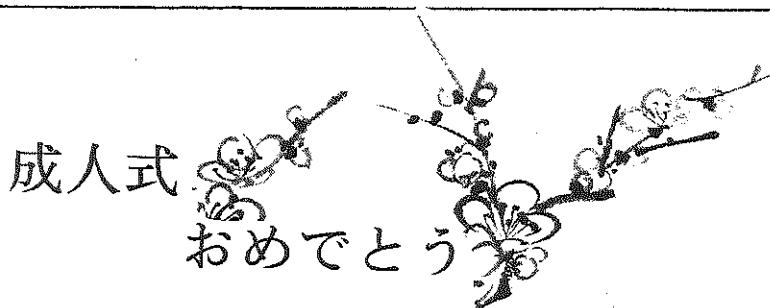
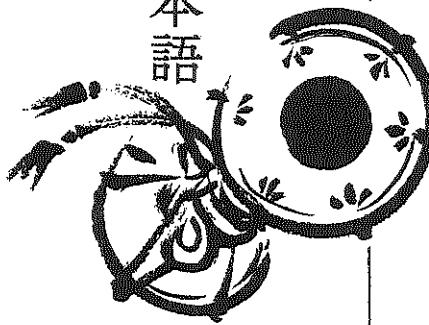
奈落  
奈落というのもサンスクリット「ナラカ」。地獄を云う。物事のどん底。奈落に墮ちたような究極の苦しみを「奈落に墮ちたような苦しみ」などと表現する。

歌舞伎舞台の地下室を指し。回り舞台やせり出しに使う。

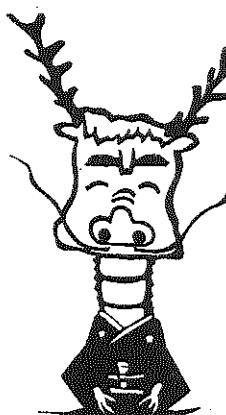
日那さん

「だんな」は元インドの古代語サンスクリットで「ダーナ」。布施。ほどこしの意味。中国では檀那と音訳した。日本では古くから寺院などを財政的に支える援護者を「檀那」「大檀那」などと呼んだ。歌舞伎などの台詞によく登場する。近世になって家を支え妻のために献身してはたらく人を指すようになつた。現代ではむしろ家長のことの蔑称として使われる傾向もある。「ダンツク」などと。ちなみに「檀家」（ダンガ・ヂケ）なども、寺院を布施によって支える家という意味からその門信徒のことを云う。ちなみに仏教では布施について財施・法施・無財施（身施・心施・言辞施・和顏施・牀座施・坊舍施・無畏施）

## 仏教の日本語



成人式 おめでとう  
中山 博貴さま 出石町鍛冶屋 中山隆雄氏方  
山田 和さま 但東町正法寺 山田 清務氏方  
中嶋 広明さま 出石町上村 中島 正枝氏方  
永井 峻之さま 但東町矢根 永井 淳氏方



紳  
鷹・馬・犬などをつなぎとめる綱。平安時代の古典にある。転じて「人間関係」・「人と人との結びつけの命運」。  
絆という漢字のつくりは昔神に捧げた犠牲の「牛」。それを正面から断ち割った絵文字。

### 挨拶

もとは仏教（禪家）で、問答を交わして悟りの深浅を試すこと。「挨」（アイ）。「拶」（サツ・サチ）。どちらも背を押したり指をかせて「責める」「迫る」。問答のやり取り。そこから転じて、受け答え、会釈、応対儀礼のやり取り、答礼返礼、会釈、などの意味を使う。

### やさしい

万葉時代、山上憶良の歌に「世のなかを憂いとやさしと思えども飛び立ちかねつ鳥にしらねば」。

ここでは「身も細るような（心細い）」意味のことば。以後、「身が痩せるほど恥ずかしい」。なお「こちらが恥ずかしくなるくらい優美な」「こころこまやかな」と変化して使われた。

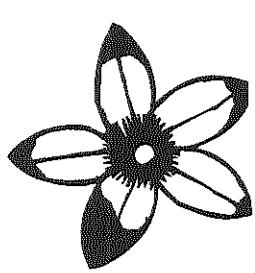
現代、「地球に優しい」などは「こまやかな心くばりを」の意味。

### 孫の手

痒いところを「孫」の手で搔いてもらう代わりに、その孫の手に似せて作った先端を手の指のよう曲げた竹などの棒を「孫の手」。もともと「孫」ではなく、中国古来の伝説上の仙女「麻姑」（孫）。この仙女の手には鳥のような長い爪がある。「麻姑を傭（ヤド）うて痒きを搔く」と云つて「思い通りにことが運んだ」意味をあらわす成句として使われていた。このことが日本へ伝来すると「麻姑」と「孫」とを関連づけて、痒いところを搔く道具の名称になつた。



小谷	葬儀	二月二日
出合市場	森友富重様	九一歳
小谷	宮嶽寿美代様	七三歳
三一	（火）	仏事役員会



四日（水）	年始参り	（但東町方面）
一日（日）	修正会	一月 勝林寺 予定
六日（金）	坪口	
七日（土）	坪口	
八日（日）	坪口（女中講）	
八日（日）	横山 誠宅	一二回忌
九日（月）	和屋・出石	
十日（火）	和屋・出石	
十一日（水）	出石	
十二日（木）	出石	
十三日（金）	出石	
十四日（土）	代議委員会	
十五日（日）	榎見（女中講）	
十六日（火）	榎見	
十七日（水）	榎見	
十九日（木）	仏事三役会	
二三日（日）	兼井圭二宅 三回忌	
二三日（日）	森友敏裕宅 忌明	
二六日（木）	みのりを聞く会	
二八日（土）	宮嶽寿美代様 忌明	
三一日（火）	仏事役員会	



（敬称略）